

円地文子文学における性のモチーフ研究

張, 亜璐

<https://hdl.handle.net/2324/5068281>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (学術), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 張亜璐

論 文 名 : 円地文子文学における性のモチーフ研究

区 分 : 甲

論文内容の要旨

本論文の目的は、女性作家円地文子の文学作品にあらわれる性的なものの表現に焦点を当て、そうした性的モチーフに基づく様々な表現が円地の作品群においてどのような意味を持ち、全体として円地の文学をどのように特徴づけているかということ考察することである。主として考察対象となるのは、女性人物の性的なものである。

本論の第一章では、近親相姦的な性の描かれ方を検討するために、主に「小さい乳房」と「鹿島綺譚」を取り上げて考察する。「小さい乳房」においては、母子相姦的な性のあり方のもとで、対立する母親としての愛情と女としての性欲に引き裂かれつつ、生涯自らの性欲を隠したままに生きる女性の生涯を確認する。「鹿島綺譚」においては、選民意識に由来する近親相姦の伝統に潜む男女間の性のあり方を分析し、広洲家の男性主導の伝統が女性主導に取って代わられていることを指摘する。

第二章では、夫婦関係の中の女の性表現を解き明かすために、主に「ひもじい月日」と「団地夫人」を取り上げて検討する。「ひもじい月日」においては、背中にある赤痣によって人生を決定づけられた女主人公の生涯から、夫によって生と性が支配されるという家父長制社会に生きる女性の運命を見て取り、また死ぬ前に一種の精神的な高みの境地に達している女の姿を指摘する。「団地夫人」においては、戦後の高度経済成長期の一つの象徴としての団地に焦点を当て、その団地によって妻の性行動に付与された特殊性、歴史性を検討することで、新しい住環境としての団地による新しい夫婦の性の在り方を明らかにする。

第三章では、未亡人という立場にある女の性の様態を明確にするために、主に「二世の縁 拾遺」と「冬紅葉」を取り上げて考察する。「二世の縁 拾遺」においては、戦争未亡人としての「私」の視点から見たそれぞれの人物の性に対する執着という主題の重層化に着目し、「二世の縁」の口述筆記の役を務めることを契機に、無意識の性的抑圧から性的解放へと心のありようが変化する女性像を指摘する。「冬紅葉」においては、姪の恋愛から影響を受けて性に目覚めた女主人公の観念的な恋愛を分析し、こうした観念的な満足を追求する女性が、性に対して執着するが、彼女の恋心が虚しいものであることを感じていることを読み取る。

第四章では、男性遍歴を重ねた女性の性の描かれ方を考察するために、主に「現代好色一代女」と「結婚相談」を取り上げて検討する。「現代好色一代女」においては、変質的な夫婦生活に影響された女主人公が娘婿を含め、数々の男と関係を持つ性遍歴を経験していることを確認したうえで、性本能のおもむくままに生きる女の性的奔放さを指摘する。「結婚相談」においては、コールガールの同時代言説と結び付けつつ、コールガール組織という道具立てにおける売春婦の性的な問題に着目し、売春を通して逆に女としての価値を回復できたと考える女の性の描かれ方を考察する。

第五章では、老人の性的なものの様態を考察するために、主に「花散里」と「老女もの」の系譜

に属している小説を取り上げて考察する。「花散里」においては、初老の女たちがそれぞれ年少者との関係を着眼点として三人三様の初老の女の性と生を検討することで、小説の特徴として二代にわたる色恋という構図及びそれに関するバリエーションが浮き彫りになることを確認する。また「老女もの」の系譜に属している作品、主に「妖」、「遊魂」三部作、「彩霧」の分析を通し、老いとエロスが作用して現実と幻想が縋い交ぜになった老女の世界が描き出される「老女もの」の特徴を明らかにし、「老女もの」の系譜の変遷における老女の心境の変化した様相も明らかにする。

第六章では、性のバリエーション、つまり異色の性の描かれ方を解明するために、主に「おとこ女郎花」と「女形一代——七世瀬川菊之丞伝——」を取り上げて考察する。「おとこ女郎花」においては、幕末の華族社会の同性愛関係における女同士性の束縛の様態について考察する。「女形一代——七世瀬川菊之丞伝——」においては、菊次郎の同性愛関係を着目点とし、そこで生理上の男という側面と芸としての女形の演技の間に生じるねじれによって引き裂かれつつ生きるという女形としての生き方を明確にする。

本論文を通し、円地文学で描かれた性のあり方が多様性に富むことが確認できるだけでなく、主人公たちの生が性的な問題と深く関わっていることを円地がいかに強調しているかということも明瞭になるのである。円地は、戦後になって、性的なものを語ることへの関心の高揚した日本近代文学において、貪欲といえるほど性をモチーフとした創作に取り組んだ女性作家の一人として位置づけられるということが確認される。